

(前稿改題)異常者に与えられる特権：創造者への反逆計画

ロンドン・パラリンピックにサタンの計略の根本がある

Greatchain

2019/08/25

NeonNettle に次々と掲載され、アメリカやその従属国で今、行われている、左翼的といわれる、歪んで異常な運動がある。これは大規模ではないかもしれないが、明らかに、国家や人類を滅ぼそうとする者たちの運動であり、反トランプを共通項にもっている。これはアンティファ (Antifa) などと結んで、内乱に発展するかもしれない。これは、かつてわが国でも左翼運動として、似たようなことが起こったが、それに反発しても、なぜかわからなかった。今頃になってそれが見えてきたと言ってもよい。これについては、7年前 2012年の、ロンドン・オリンピックの特に「パラ」の方に、いくつもの問題を解くカギが隠れている。ちなみに、このオリンピックのセレモニーは、莫大なカネをかけて、イルミナティが演出したものである。

ここに、5つほどの例を簡単に紹介する（見出しを翻訳する）：——

* 「〈彼〉とか〈彼女〉という言葉を使うことは、オーストラリアの新しい Transgender Laws (性転換法) では、違法になる予定」——トランスジェンダーに、やさしい言葉を使わない者は、新法の通過によって法律違反となる (2018/12/10 記載)

* 「バージニア州のクリスチャンの教師が、gender fluid (ジェンダー流動的) な少女を〈彼女〉と呼んだためにクビとなる」 (2018/12/10 記載)

* 「学校が6年生の男児を処罰した。それは彼が、性転換するクラスメートのことを、〈男の子だ〉と言ったからだ」 (2019/8/10 記載)

* 「78%のジェンダーの混乱する大学生が、精神的健康に問題をもっている可能性がある——研究により判明」 (2019/08/24 記載)

* 「NBC ニュース：ヘテロセクシュアリティ (通常の男女性関係) が、〈地球的抑圧の根底にある〉」——左翼メディアが、正常な性関係は、女性にとってもはや機能していないと主張 (2019/08/24 記載)



ジェンダー混乱の子供たちに対する「包括的」方針を取る学校が、ますます増えてきた

こうしたことはキチガイじみているが、現実には起こっている。一言でいえば、異常なもの、歪んだものを、正常として、これに市民権を与え、正常なものには自己主張をさせない運動である。言い換えれば、神の創ったものを認めない、破壊運動である。これを、大人はともかく、子供に教育とし続けていけば、精神異常が発症するだろう。サタンというものを想定しなければ、これは理解できない。サタンの支配する国で美術教育をすれば、あのデンバー国際空港の、有名な壁画を美しいと感じる人間ができるだろう。「子供の死体のある風景」<http://www.dcsociety.org/2012/info2012/180330.pdf> この運動の淵源には、「私は高い所で君臨する、あの者に復讐してやりたい」といった若きマルクスの叫びが響いている。これは神への憎悪であり、経済学などそれに付けた尾ひれだった。

我々は、人間を内部から破壊する者たちと戦っているのである。もっとわかり易いのは（その気になってよく見れば）、2012年の、ロンドンのオリンピック・セレモニーである。これは完全に再生できるので、ぜひご覧いただきたい。まず目につくのは、会場の真ん中に鎮座する、手足のない重度の障害者の巨大な像である。これは、子供の死体や性異常者と同じくらい、見て不快である。もし身障者の人権を尊重するというなら、この人を創った神の本来の意図と、創られたこの人の本来の希望を尊重しなければならない。不幸にしてそれがうまくいかなかった（あるいは怪我をした）というなら、我々が想像力によって、彼の本来の美しい姿を復元できるようにしてあげねばならない。（隠すのでなく、本来のものが現れるようにする。）欠陥をあらわにして人権を主張するというのは、その欠陥がどうすることもできない現実だという意味であり、それを見せつけて神に復讐するという動機さえ伺えるだろう。少なくとも、このセレモニーでは、本来のオリンピック精神とは正反対の、そういう不健全な精神がテーマになっている。だからほとんどの人がロクに見ていない。

もう一つ更に知られていないことは、このセレモニーのテーマが、シェイクスピアの『テンペスト』を下敷きにしていることである。しかし、これもサタンの動機からであって、

このおそらくシェークスピアの最も美しい戯曲を、意図的に汚すことを狙っている。主人公の魔法の使える王（プロスペロー）は、明らかに神に擬せられている。したがって、その娘のミランダは、地上で最も美しくなければならない。ところがこのセレモニーでは、ミランダは、髪は短くて、女か男か判別できず、衣服も粗末で、おまけに杖をついている。

先日から気づいている、面白いことが一つある。それはキャリバンという、王に使われている醜くく邪悪な、この島の「怪物」がおり、この者がミランダを性的につけ狙い、「この島をキャリバン（の子孫）で一杯にしよう」(I, ii) と考えていることである。先日死んだ、悪辣なペドファイル、ジェフリー・エプステーンが、不思議なことに、同じようなことを言っていることを知った：——彼は「秘密の寺院をもつプライベートな島で、何百人という女性に彼の DNA を植え付け、トップ科学者を巻き込んで、新人類を作り出す計画をもっていた」——ワオ！

<http://www.dcsociety.org/2012/info2012/190817.pdf>

もう一つ、この圧倒的に美しい世界を「まがいもの」として認識せよと教える、恐るべき例は、リチャード・ドーキンズである。これも人を狂わせ、病人を作り出す、間違いなくサタンの計略である。（「子供の死体のある風景」）



ロンドン・オリンピックで出てきた Caliban]